

## 修士と学士の大きな違いは、経験量の差。

自ら考えて試行錯誤しながらひとつのテーマに取り組んだ経験は、今後の仕事や人生の礎になります。そして大学では卒業研究がそのための貴重な時間になります。

しかし卒業研究だけでは、経験の時間が足りないのも事実です。例えば四季のある日本にて、夏の間だけカブトムシを観察しても、カブトムシが冬に地中で暮らしていることは見えてきません。しかし多くの学生が卒業研究に取り組む時間は1年未満であり、多くのことを見逃してしまうことが多々あります。また締め切りに追われて、一度の実験や観察だけで「全てがわかった」ように錯覚してまとめてしまうことも問題です。

卒業研究だけだと、自分の実験技量や見落としを冷静に見つめる機会をなかなか持ちにくいのです。

時々「大学院に行くメリットはなんですか？」と聞かれることがあります。自ら学ぼうとせずに見返りだけを期待する人にとっては、大学も大学院も退屈で無駄な場所ではないでしょう。しかし、自ら学ぶならば、以下に挙げるような経験と知恵を身につける最上の機会になると思います。

### <大学院（修士過程）で学ぶ意味>

#### 1. 卒業研究の反省や経験を生かして、自分で再チャレンジが出来ます。

研究の意義を考えて研究を進め、結果をまとめて考察できます。また学会発表などを通じて、客観的に自分の能力や立ち位置を確認できます。卒研の反省や経験をふまえて、自ら改善するプロセスは、何事にも代え難い経験になります。

#### 2. 研究室では卒研に教える立場になります。

教員もそうですが、教えることによって学べることは多いです。

#### 3. 就活で他大学と対等な立場に立てる。

理系と言われる多くの国公立大学では、多くの学生が大学院へ進学します（多くの国公立で5割以上。上位校では9割が進学するようなケースもまれではない）。

人気のある就職先では、就職活動時には彼・彼女らに混じって、自分を売りこんでいくことになります。大学のネームバリューに加えて、経験を積んだ院生と競いあうケースも多く、どうしても勝ち目が薄くなります。その結果、高卒や高専卒の学生と同じ職種へ就いている学生も見かけられます。就職率（数字）そのものはそれほど悪くないのですが、その実態（質）は本人の希望に沿っていない場合もあるようです。

大学院では、自分の頭で考えて試行錯誤しながら2年間じっくりと研究に取り組めます。学卒を採用して社内ですぐに教育できる会社は、それほど多くありません。修士を持った人間が即戦力ということはありませんが、会社にとっても、ある程度の知識と研究経験を持ち、自力で勉強する習慣を持った修士を教育した方が効率的な場合もあるのです。